The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	再び日本語の「胸」の理解をめぐって : 英語との比較から
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 39-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

再び日本語の「胸」の理解をめぐって－英語との比較から－

博士後期課程 2 年　後藤　秀貴

1　はじめに

近年，身体語彙を構成要素とする慣用表現を認知言語学の枠組みに基づいて分析する研究が増加している（e.g., Sharifian, Dirven, Yu, and Niemeier 2008）．また，感情を表す比喩表現がなぜ・どのようにして生み出されるのかという問題に関心が寄せられつつある（e.g., Kövecses 2005；楠見 1996；楠見・米田 2007）．概念メアファー理論は，その初期から「身体性（embodiment）」を強調しており，特に感情の概念化には体温や血圧の変化などの身体経験が不可欠であることが Lakoff や Kövecses の一連の研究によって議論されている（e.g., Lakoff and Kövecses 1987；Lakoff 1987；Kövecses 1995）．一方，身体経験の影響を認めつつも，感情の文化モデルを十分に説明するには社会・文化的文脈をより重要視すべきとする立場もある（e.g., Geeraerts and Glonderaerts 1995）．このような動向を受け，Kövecses（2005）は比喩表現成立の動機付けを「身体経験 (bodily experience)」と「社会・文化経験 (social-cultural experience)」の 2 種類に大分し，これらを比喩表現の言語普遍性・言語相対性と対応づけている．Kövecses（2005）の最も単純化されたモデルによれば，比喩表現の言語普遍性は我々が人類として共通の身体基盤を有していることに起因し，反対に，言語間の相違性は当該言語に根付いた社会・文化的な慣習・信念・常識等と深く関わっている。

筆者は後藤（2015）において，「腹」あるいは「胸」を含み，何らかの精神作用を表す日本語の慣用表現を身体基盤，社会・文化基盤の観点から分析した．(1) のように，「胸」の慣用表現では，喜び・期待・悲しみなどの感情が心臓の鼓動や閉塞感などの身体変化（生理感覚）によって表される傾向にある．一方，「腹」は怒りのみならず，心の安定や本音などの幅広い精神作用と結びつくが (2)，いずれも腹部の身体変化というよりは，丹田周辺の身体感覚を強調する日本の伝統（「腰肚文化」：齋藤 2000）や「本音と建前」などの社会・文化的文脈によって成立したと考えられる表現が多い．このような観察から，「胸」表現の動機付けとしては身体基盤を，「腹」表現の動機付けとしては社会・文化基盤を中心に据えるべきであることを論じた．

(1)　a. 胸が｛踊る，ときめく，轟く，弾む｝　【鼓動（心拍）】
　　b. 胸が｛苦しい，塞がる｝，胸を｛締め付ける，潰す｝　【閉塞感】
(2)　腹が立つ，腹が据わっている，腹を｛見抜く，割る｝，腹の内を探る

本研究の目的は，上で述べた Kövecses（2005）の議論と後藤（2015）の主張を合わせることで導かれる (3) の仮説を検証することである．このうち本稿では，日英語の胸部に関する慣用表現を比較検討することによって，第一の仮説を検証する．

(3)　①身体基盤が顕著な胸部は，その比喩表現の多くが通言語的に観察される．
　　②社会・文化基盤を主な拠り所とする腹部は，その比喩表現が通言語的に観察されにくい．

論文の構成は次の通りである．まず，2 節では，日英語の身体語彙の特徴を示すことで，本研究で比較対象とする語の選定を行う．3 節では，本研究で援用する楠見・米田（2007）の研究を概観し，具体的な分析方法を示す．4 節では，胸部に関する日英語の慣用表現を動機付けの観点から分類・観察することで，互いの共通性と相違性を明らかにする．この分類・観察をもとに，5 節では，日英語の胸部の理解に関する上記の仮説を検討し，6 節で結論と今後の課題を示す．

2　調査語の選定：外的部位と内臓

身体語彙は，①「腹」や「胸」などの主に外的部位を指す語と，②「きも」や「心臓」などの内臓を指す語に分けられる．日本語において，外的部位を指す「腹」や「胸」が精神作用と強く結びついていることは，先行研究で繰り返し論じられてきた（e.g., 田中 2003；有薗 2007）．一方で，内臓を指す語については，慣用表現としては意味・用法ともに限定される傾向が見られる．例えば後藤（2016）で論じたように，

「きも」,「はらわた」は部分的に「腹」との互換性が見られるが（e.g.,「{腹／きも} が据わっている」），慣用表現としての広がりを見る限り，身体部位詞として基本レベルに置かれるのは「腹」である．この他に,「胃」や「心臓」などの漢語由来の語も挙げられるが，いずれも精神作用との関わりの中で用いられる機会はほとんど無いといってよい（『大辞林』では「胃」が 0 項目,「心臓」が 3 項目）．これに対し，英語では，外的部位よりも内臓を指す語の方に慣用表現としての定着が見られる．例えば，日本語の「胸」に対応する指す語としては *bosom/breast/bust/breast* が挙げられるが，これらの語を含み，何らかの精神作用を表す慣用表現は限られており（*Roget's International Thesaurus* では，*bosom*：1 項目，*breast*：5 項目，*bust*：0 項目，*chest*：2 項目），代わりに *heart* の慣用表現が圧倒数を占めている．

以上を要するに，慣用表現の基本語として外的部位を選択するか，内臓を選択するかについては日英語で違いが見られるようである．では，慣用表現以外ではどうであろうか．宮地（1972）は，日本人が胃や心臓などの臓器を弁別的に意識し，語として定着させるのは漢語や中国医学が伝わった後のことであると述べ，次のように考察している．

(4) 「…牧畜民族のばあいは家畜の解体などにより，内臓は日常生活に密着したものであり，〔心臓〕に該当する語は基礎語の扱いになることがある（…）しかし，日本人のばあいは，現実世界で内臓に接する機会は少ない．いわゆる文学作品などにおいては，比喩的な用法は別として，内臓そのものをあらわす例を見ることは稀である．」（宮地 1972:34）

反対に，英語の *heart* に関して，それが胸部を指す語として定着していることを示す例を挙げておこう．臓器としての心臓を原義とする *heart* は，メトニミー的意味拡張により，外的部位としての胸部を指すことがある（e.g., *hold A close to one's heart*＝「A を胸にひしと抱きしめる」）[1]．このような内臓から外的部位への意味転換は，日本語では難しい（e.g.,「{*心臓／胸} にひしと抱きしめる」）．

以上に述べた事情を踏まえ，本稿では，外的部位を指す *bosom/breast/chest* の 3 項目に心臓を指す *heart* を加えた 4 項目を取り挙げる（以後，まとめて「胸部」とする）．なお，後藤（2015）で述べたように,「胸」は外的部位のみならず，心臓の身体感覚に基づくと考えられる比喩的意味を持ち，この限りにおいて，*heart* を「胸」の比較対象に置くことは問題ないように思われる．しかし，のちに取り挙げるように，*heart* には日本語の「胸」ではなく,「こころ」に相当すると考えられる比喩的意味も有しており，より広範囲の精神作用と対応している．「こころ」は現代では臓器としての意味を持たないものの,「しん（心）」,「しんぞう（心臓）」,「しんのぞう（心の臓）」が漢語として輸入されるまでは，心臓としての意味を持っていたとの記録がある（宮地 1972）．本稿では,「こころ」にも本来，何らかの身体的な基盤が存在したと想定し，のちに *heart* に関する議論の中で補足的に取り挙げることとする．

3 方法論

3.1 感情言語の階層モデル：楠見・米田（2007）

楠見・米田（2007）は，ヒトが感情経験を言語化するための動機付けとして「感覚・運動的入力」と「社会・文化的入力」を想定している[2]．感覚・運動的入力とは，ヒトが感情を経験する際に自律的に生じる内的感覚（e.g., 動悸）や外的変化（e.g., 手が震える）のことを指し，これらは時間的・空間的隣接性の原則に従って「胸が騒ぐ」,「手がわななく」などの表現を産み出す．社会・文化的入力とは，いわば感情の理解を支える知識のことで，家庭や学校，メディアなどを通じて社会・文化的に形成・共有される常識や信念などが含まれる．これらの常識や信念は，我々が感情を処理し，適応するための方針を示す規範として，また，感情を典型的なスクリプト（script）の枠内で捉えることを促進する基盤として機能する．

楠見らはさらに，感情経験から言語表現を生成するための表象の階層として，【図 1】に示す 3 種のレベ

---

[1] *OED* には，"3. a. In extended use: that part of the front of the body which is near to the heart; the vicinity of the heart; the chest. Exp. with reference to the action of placing or holding something close to this location as an expression or gesture of affection, esteem, etc., or for comfort." とある．（"heart, *n.*, *int.*, and *adv.*" *The Oxford English Dictionary*. 3rd ed. (2013) *OED Online*. Oxford University Press. 20 March 2017 <http://dictionary.oed.com/>.）

[2] 楠見（1996）も参照．なお,「感覚・運動的入力」と「社会・文化的入力」の概念は Kövecses（2005）の挙げる「身体経験」と「社会・文化経験」に相当すると考えて差し支えない．

ルを提案している.

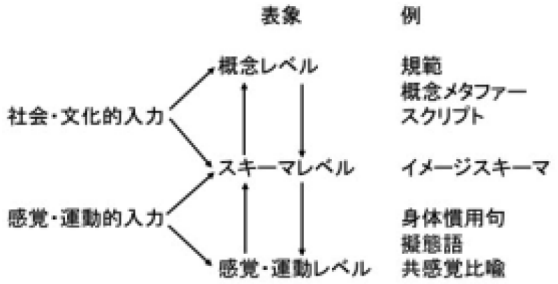

図 1. 感情言語の階層モデル（楠見・米田 2007: 56）

まず,「感覚・運動レベル」とは, 主に身体的な感覚・運動入力の影響を受ける最も基本的な表象レベルで,「明るい気分」などの共感覚表現,「どきどき」などの擬態語,「手がわななく」などの身体慣用表現（メトニミー）を生み出す.「スキーマレベル」とは, 感覚・運動的入力が抽象化を経た表象レベルで, それには「喜びが溢れる」,「怒りを抑える」などの表現を支える＜容器＞, ＜垂直性＞, ＜バランス＞, ＜コントロール＞などのイメージスキーマ（image-schema : Johnson 1987）が含まれる. これらのイメージスキーマは「概念レベル」において感情のスクリプトとして構造化され, 概念メタファーが成立する。

3.2 本研究の分析方針

本稿では, 楠見・米田（2007）の「感情言語の階層モデル」に基づき, 胸部の慣用表現を分類・観察していくが, 次の点において異なる方針を採る. 楠見・米田（2007）は感情に関わる身体慣用表現を 2 種類に分け, 表情や身体部位の表現を感覚・運動レベルの議論の中で, 内臓の感覚（内的変化）の表現をスキーマレベル以上の議論の中で取り挙げている. このうち,「胸」の表現は「腹」の表現とともに全て後者の中に収められているが, 本稿では, 感覚・運動レベルの「胸」表現も想定する. その理由は 2 つあり, 第一に, 本稿では, 楠見らが扱っていない「胸が高鳴る」などの純粋なメトニミー表現を観察に加えるからである. ここでいう純粋なメトニミー表現とは, 身体感覚を直接的に言語化したもので,「胸が高鳴る」は「どきどき」などの擬態語と同じレベル（つまり, 感覚・運動レベル）に分類される. 第二に, 楠見らは,「胸を締め付ける」,「胸が一杯になる」などの表現を全て＜容器＞のイメージスキーマから生じるものと分析しているが, 本稿では, 前者の「胸を締め付けられる」のような種類の表現をより感覚・運動レベルに近いものとして扱うからである. つまり,「胸を締め付けられる」は, 必ずしも＜容器＞のイメージスキーマに基づいて生み出されるのではなく, むしろ胸部の閉塞感が誇張されることで生み出されるメタファー表現と考える. この場合, 閉塞感は胸部を＜容器＞として理解するイメージスキーマを呼び込む役割を果たしていると捉えられる.

従って, 本稿では ①感覚・運動レベル, ②感覚・運動レベル（誇張が関わるもの）, ③スキーマレベル, ④概念レベルという 4 つの分類枠を設け, 表現を観察していく. 今回, 日本語のデータは 6 種の辞書から, 英語のデータは Niemeier（2000）および 5 種の辞書から収集した[3]. 収集された表現は, 上の 4 種の分類枠に振り分け, 日英語共通のラベリングを与えた.

4 データ

4.1 感覚・運動レベル : メトニミー表現・メトニミーに基づくメタファー表現

はじめに扱うのは, 感覚・運動レベルの表象である. ここでの表現は, メトニミー表現, あるいは Goossens（1990）が「メトニミー由来のメタファー（metaphor from metonymy）」と呼ぶ種の比喩的特徴を持つ表現に相当する. メトニミー由来のメタファーとは, 本来, 特定シーン内での隣接性によって成立していたメ

[3] 用いた辞書は以下の通りである.
日本語 :『からだことば辞典』;『感情表現辞典』;『新選国語辞典』;『大辞林』;『日本語大辞典』;『日本国語大辞典』
英語 :『英和イディオム完全対訳辞典』; *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* ; *Roget's International Thesaurus* ;『しぐさの英語表現辞典』;『新和英辞典』

トニミー表現が繰り返し用いられることによって，ソースを必須要素としないメタファー表現へと変化したものである[4]．例えば，*beat one's breast*（「ひどく悲しむ・怒る・悔いる」）は，元々，悲しみ・怒り・後悔などの強い感情を文字通り「胸を叩く」動作によって表現していたことに由来するが，現代では，こうした動作を表現成立の必要条件としない．すなわち，*beat one's breast* は，すでにソースとしての「胸を叩く」という動作から独立して用いられうる．ただし，Goossens が述べるように，メトニミー由来のメタファーとメトニミーの区別は状況依存であり，もし *beat one's breast* の表現が用いられた時に実際に胸を叩いているのだとしたら，それはメトニミー表現とみなされる．

胸部の表現においても，メトニミー表現，あるいはメトニミー由来のメタファー表現として位置付けられるものが日英語で多く存在する．下に挙げた表現のうち，(5)–(7) は感情に伴う内的感覚，(8) は感情に伴う外的な身体変化，(9) は感情表出としての動作（しぐさ）である．

(5) 【鼓動】
a. 胸が｛高鳴る／轟く｝
b. *heartthrob / one's heart beats {fast / wildly}*

(6) 【閉塞感・不快感・痛覚】
a. 胸が｛苦しい／悪い｝，胸を痛める
b. *feel sick at heart / one's heart aches / the pressure in one's heart*

(7) 【熱感覚】
胸が熱くなる，胸を冷やす (cf. *warm-hearted / cold-hearted*)

(8) 【呼吸の乱れ（胸の動き）】
one's {bosom / chest} heaves

(9) 【動作】
a. 胸を｛摩る／叩く／撫で下ろす／張る｝
b. *beat one's {breast / chest} / puff one's chest / stick out one's chest*

(5)–(7) の通り，胸部に関連づけられる生理感覚は心臓の鼓動 (5)，閉塞感・不快感・痛覚 (6)，熱感覚 (7) がある．このうち，胸部の身体基盤として最も特定が容易なのは心臓の鼓動であり，日英語共通して期待・驚きなどによる一時的な興奮状態を表す．(6) についてはそのラベリングが不確かであり，いずれも胸部の違和感や圧迫感から得た感覚を漠然と表したものと考えられる．(5) とは異なり，日本語・英語ともに不満・不信感による憤り，悲しみなどの否定的な感情を表す．(7) については日英語で異なる分析が必要である．日本語の「胸が熱くなる」，「胸を冷やす」は主体が経験する感動や驚き・恐れを表すが，英語の *warm-hearted / cold-hearted* は他から見た主体の人柄を表す（cf.「温情」，「冷淡」）．後者の場合，主体の胸部の生理感覚が特定の感情と対応づけられる訳ではないため，感覚・運動レベルの表現には含まれない．

(8)，(9) の表現は，いずれも外から見た胸部の動き・動作を描いたもので，(5)–(7) とは異なり，専ら外的部位としての *breast/bosom/chest* が使われている．(8) については，興奮で呼吸が荒ぶる際の胸部の動きを捉えたもので，日本語の「胸」には対応する表現がない（ただし，稀に「胸が波打つ」とも言う．また，胸部の動きに関連するものとしては，(9) の「胸を撫で下ろす」があるが，手を添えて「撫でる」というしぐさである点が異なる）．(9) の動作については，意味も含めて日英語で対応するのは「胸を張る」と *puff one's chest / stick out one's chest* の組のみである．これは，一部の動作が自律的に生じるのではなく，意図的に為されるものであることに起因すると考えられる[5]．例えば，上述の *beat one's breast* は元々神を前にして己の非を悔いる宗教的な儀式に基づいたものであり（小林 2008），この場合，胸を叩くという動作は文化的慣習によって動機付けられている（ただし，日本語の「胸を叩く」と同様に，自信を示すしぐさとしての意味でも用いられるようである）．

---

[4] Goossens（1990）ではソース（source）の代わりにドナー（donor）という用語が用いられているが，同じ概念を指すと考えて差し支えない．

[5] この意味において，象徴的行為としてのしぐさは感覚・運動レベルに含めるべきではないかもしれない．なお，興味深いのは，反対になぜ胸を張るといった動作が，意味も含め日英語で共通しているのかという問題である．これは，動物が自らの力を誇示するために体の一部を大きく見せるという本能的動作と関連づけられるかもしれない．あるいは，人が自信を持つと姿勢を正し（上反り），自信をなくすと項垂れるという身体経験に基づくとも考えられる．

4.2　感覚・運動レベルからスキーマレベルへ：メトニミーに基づくメタファー表現（誇張）

Niemeier（2000）は，英語の *heart* の理解が，＜人＞のメトニミー（*heart* as a person），＜生命体＞のメタファー（the *heart* as a LIVING ORGANISM），＜価値あるもの＞のメタファー（the *heart* as an OBJECT OF VALUE），＜容器＞のメタファー（the *heart* as a CONTAINER）という 4 つの文化モデルの支えによって成り立つと主張している．これらのうち，本小節で扱う表現は主に＜生命体＞のメタファーの例として挙げられているものに相当する．この種の表現が 4.1 節の表現と大きく異なるのは，いずれも誇張によって字義性が失われている点であり，例えば (5) で挙げた鼓動の乱れは，踊る，弾む・跳ねる (*leap*)，羽ばたく（*flutter*），ときめく[6]，騒ぐといった生物の活動に喩えられる (10)．反対に，驚きなどの突発的かつ激しい情動の場合，鼓動が一線を超え，停止してしまったかのように表現される (11)．なお，日本語の「胸」には (11) に対応する表現は存在しないが，「びっくりして心臓が止まる」などの表現がごく一般的に用いられることを考えると，英語と同様の理解様式は日本語でも存在するようである．

(10)　【動揺】
　a. 胸が｛踊る／騒ぐ／ときめく／弾む｝
　b. *one's heart flutters / one's heart leaps with expectation*

(11)　【鼓動の停止】
　one's heart {misses / skips} a beat / one's heart stands still

(12)–(15) は主に (6) でみた閉塞感・不快感・痛覚から派生したと考えられる表現である．

(12)　【閉塞】
　胸が｛すく／詰まる／痞える／塞がる｝

(13)　【圧迫】
　a. 胸が潰れる，胸拉ぐ，胸を締め付けられる
　b. *wring one's heart*
　c. *squeeze one's chest*

(14)　【破裂】
　a. 胸が｛張り裂ける／引き裂ける｝
　b. *heartrending / one's heart (almost) burst with something*

(15)　【損傷】
　a. 胸を打つ，胸を｛抉る／刺す／突く｝
　b. *break one's heart / heartbroken / one's heart bleeds for someone / pierce one's heart*

(12) は胸部の内側から加わる圧力を，(13) は外からの圧迫の様子をイメージしたものである．さらに，胸部に加えられた圧力は「胸」や *heart* の破裂（*rend/burst*）を招くものとして理解されている (14)．特に (12) 関しては，気持ちのわだかまりを含意していることから，後に取り挙げる胸部に感情や気持ち・考えが収まるという＜容器＞メタファーの原形に当たるものと考えられる．(15) については，「胸を痛める」で見た痛覚（あるいは鼓動）を胸部への打撃に喩えた表現であると考えられる．打つ，刺す（*pierce*），付くなどの単発的な打撃が，不意に生じる感動・驚き・悲しみを表している点が興味深い．

最後に挙げるのが，(7) の熱変化に基づくと考えられる表現である．

(16)　【燃焼】
　a. 胸を焦がす
　b. *burn one's heart / heart-burning*

(16) で注目すべきは，単なる熱変化ではなく，燃焼に関する語が用いられている点である．これにより，英語では *heart* が燃え盛る様子を以て不満・不平・妬みなどの憤った強い感情を，日本語では「胸」が焦げる様子を以て寂しさ・恋しさ・悲しさなどの切ない気持ちを指している．このように，日英語では対応する感情の性質に微妙な差が見られるものの，いずれも感情が人の精神をすり減らす様子を含意している点

[6] 「ときめく」は期待や不安などによる動悸を表すが，字義的用法は存在しないため，本節での議論に含めている．なお，『日本国語大辞典』によれば，一般的な仮名表記に加え，「衝跳く」などの表記を用いた例も見られる．

で共通している[7].

4.3　スキーマレベルから概念レベルへ

4.1 節から 4.2 節にかけて，一見単なるメタファーとも思われる表現が，感情に伴う生理感覚・運動という身体経験によって裏付けされることを論じた．日本語と英語では，慣用表現として主に外的部位（「胸」）を用いるか，内臓（*heart*）を用いるかという点，また，生理感覚をどのような事象に喩えるかという点（§4.2）において相違が見られるものの，いずれも偶然としては処理し難い類似性を示している．これらの表現は，＜身体経験＞−＜精神作用＞という特定シーン内でのメトニミー基盤によって裏付けされるものであった．以後，これらの複数の経験の束に抽象化・類推という，より高次の認知的操作が加わった表象レベルを扱う．すなわち，スキーマレベル以上の表象では，特定シーン内での＜身体経験＞−＜精神作用＞という対応ではなく，＜胸部＞−＜精神＞というより抽象化されたメタファー的対応が前提となる．

本小節では，のちの概念レベルの基本要素をなす 2 種類の一般メタファー（イメージスキーマ）を確認しておく．第一に挙げるのが，抽象物を具象物に喩える「存在のメタファー（ontological metaphor）」（Lakoff and Johnson 1980）である．これにより，「胸」や *heart* などの部位・臓器は，＜具象物＞（ENTITY）として理解される．当然ながら，胸や心臓は本質的に物理的な存在であるが，ここで想定しているのは，身体から具象物へというさらなる抽象化であり，身体的性質からの逸脱を含むものである．この抽象化により，硬さ・重さなど，通常字義的な意味では問題とされない，あるいは非現実的な胸部の性質もメタファー表現中に組み込むことが可能になる（e.g., *harden one's heart / heavy-hearted*）.

第二に，＜具象物＞としての胸部を＜容器＞（CONTAINER）として特定化する「容器のスキーマ」（Johnson 1987）である．このスキーマは，＜内容物＞として概念化された感情や考えと統合することで，4.4 節で取り挙げる＜容器＞のメタファー表現を産出する[8].

(17) a. 胸の｛内／底｝
　　b. *{in / the bottom of} the heart*
　　c. *in {the chest / the bosom / the breast}*

「存在のメタファー」と「容器のスキーマ」は，胸部と精神の比喩的関係に限らず，あらゆる抽象物の比喩的理解に浸透しており（Lakoff and Johnson 1980, 1999 ; Johnson 1987），胸部の身体経験のみでその成立の動機付けを説明することはできない．しかし，＜容器＞のスキーマに関して言えば，飲食物の摂取・排出や呼吸など，ヒトの身体そのものが本質的に容器の一種として機能するという点において，動機付けを見出すことができる（Johnson1987 : 21）.

4.4　概念レベル①：心的内容を収める容器としての胸部

本小節では，胸部が感情・考えなどの心的内容を収める容器として概念化された表現を扱う．4.3 節で示したスキーマ的要素は，次の存在論的対応（ontological correspondence : Lakoff 1987）を構成すると考えられる．

(18) ＜内容物＞−＜心的内容＞
　　＜胸部（容器）＞−＜精神＞

＜容器＞メタファーについては，Lakoff や Kövecses が感情の誘因から表出までのスクリプトモデルによって論じており（Lakoff 1987 ; Lakoff and Kövecses 1987 ; Kövecses1990），それに従えば，感情は［誘因→発生→制御→増長・制御の喪失→表出］という段階を経る．本モデルに従い，胸部の慣用表現を分類すると次のようになる．

---

[7] 「焦がす」は「対象物を損なう」という段階を前景化した語であり，「胸を焦がす」が主体側の苦悩を強調するのは，このような字義的意味に帰することができると考えられる．

[8] 先述の通り，楠見・米田（2007）では＜容器＞のほかに＜垂直性＞，＜バランス＞，＜コントロール＞を挙げている．これらは特に，＜怒りは容器の中の熱流体＞（ANGER IS HOT FLUID IN A CONTAINER）のような感情メタファーの構成要素として挙げられてきたものである（Lakoff 1987）.

(19) 【隠蔽・収容】
a. 胸に｛一物／収める／畳む／秘める｝
b. *{have / keep} something in one's heart*
c. *{have / keep} something on one's chest*

(20) 【充満・膨張】
a. 胸が｛一杯になる／膨らむ｝
b. *fill one's heart (with something)*
c. *one's {bosom / chest} swells / one's chest expands*

(21) 【露呈】
a.胸の内を明かす，胸を割る
b. *open one's heart*
c. *get something off one's chest / make a clean breast of something*

まず，主体の感情・考えは胸部に収められるが (19)，徐々に量を増し，胸を満たすことで，内部を圧迫し膨張させる (20)．そして何らかのきっかけにより，それらが解放されると，胸は再びわだかまりのない綺麗（*clean*）な状態へと戻る (21)．このように，胸部の慣用表現は Lakoff らのスクリプトのうち，制御，増長，表出の段階に対応すると考えられる表現を含んでいる．しなしながら，各段階で表される感情・考えが全く同じ道筋を辿る訳ではないことに注意する必要がある．例えば，「胸に一物」が表す企みは，時機を見計らって意図的に明かされるものであり（cf.「胸を割る」），必ずしも (20) の充満・膨張段階を経る訳ではない．これは，Lakoff らのモデルが感情，とりわけ怒りに基礎を置いたものであることに起因する．

(19)–(21) の他に，感情が＜液体＞として特定された表現も日英で共通して観察される．(22a) は，(7) や (16) でも取り挙げた熱感覚が介入した表現と考えられ，この場合，液体の熱は怒りの強さに対応づけられる（Lakoff 1987 ; Lakoff and Kövecses 1987）．一方の英語表現 (22b) では，溢れる（*overflow*），注ぐ（*pour*）の動詞によって感謝・幸福感，心配等の表出が描かれている[9]．

(22) 【沸騰・注水・溢出】
a. 胸が｛沸き立つ／煮える｝
b. *a heart overflowing with {gratitude / happiness, etc} / pour one's heart out*

さて，ここまでは感情・考えなどの心的内容が胸部に発生・増長し，表出することを表すメタファーを見てきたが，それとは反対の方向性を示唆する表現も見つかる．すなわち，外から物事を受け容れ，収容するという胸部の役割である．(23) が示すように，「胸」や *heart* に落ちる・沈む（*sink*）ことは物事を受け入れ，深く納得する・感銘を受けることを表し[10]，反対に，*heart* を閉ざす（*close*）ことは他の干渉を受け付けない内向的な人柄を表す．また，胸部の容積は，様々な考えや価値観を受け容れることのできる力に比例しており，胸や *heart* が狭いことは狭量であることを (24a)，*heart* が大きい（*great/big/large*）ことは広量であることを示す (24b)[11]．

(23) 【受容】
a. 胸に落ちる
b. *sink into the heart / close one's heart to something*

(24) 【容積】
a. 胸が狭い
b. *great heart / have a {big / large} heart / big-hearted*

---

[9] 液体表現は実例としては多く観察される：「闘志を胸にたぎらせる」，「胸に｛感謝の思いがこみ上げる，後悔が湧き上がる，満ちる不快感｝」（全て「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から）．なお，Niemeier（2000）は *pour one's heart out* を＜容器＞メタファーに分類しているが，厳密に言えば，*heart* は＜容器＞ではなく，注がれる＜液体＞として解釈されている．

[10] 日本語の「胸に落ちる」は「納得」，英語の *sink into the heart* は「感銘」の意味であり，対応しない．*sink into heart* に相当する日本語は「心に染みる」である．

[11] 説明し難いのは，日本語では寛大さを表す際に「胸が広い」とは言わないことである．寛大さを表す表現として「腹が大きい」や「懐が深い」などがあることを考えると，「胸」だけでなく身体の表現体系を考慮した上で論じる必要があるかのかもしれない．今後の課題としたい．

以上をまとめると，＜容器＞メタファーでは，4.1 節 4.2 節の感覚・運動レベルに引き続いて，日英語で共通性が見られた．＜容器＞メタファーでは感情以外の精神作用にも広がりが見られ，企みや納得，寛大さなど，特定の生理感覚とは関連づけがたい種の精神作用との対応が観察された．

4.5　概念レベル②：精神としての胸部

4.2 節で述べたように，Niemeier（2000）は，英語の *heart* の理解が 4 つの文化モデルの支えのもとに成り立つことを主張している．うち，4.1 節から 4.2 節にかけて扱った表現は主に＜生命体＞としての *heart* モデルの例として，4.4 節で扱った表現は主に＜容器＞としての *heart* モデルの例として挙げられている．残るは　＜人＞のメトニミーモデルと，＜価値あるもの＞のメタファーモデルである．調査の結果，これら 2 つのモデルに相当する日本語の「胸」表現は見つからないことが明らかになった．代わりに，日本語の「こころ」を含む表現で極めて類似した理解様式が観察されている．ここでは，*heart* の比較対象として「こころ」を取り入れ，両言語の表現を観察していく．

4.5.1　人としての胸部

Niemeier（2000）は，*heart* が精神活動を営む「人」という存在を象徴する部位であることを示す文化モデル "*heart* as a metonymy for the person" を提案している．*Heart* は愛（love）に始まり，同情（compassion），哀れみ（pity）などの感情を広く司る対象として理解され，その状態や活動に応じて感情が表現される．Niemeier のモデルを本稿での議論に合わせると，その存在論的対応は (25) のような単純な形で示される．先ほどの容器メタファーとは異なり，内容物としての心的内容を含意しないことに注目されたい．

(25)　＜胸部＞−＜精神（人）＞

感覚・運動レベルの表現では，胸部は感情の発生に応じて反応し，変化する動的な対象として描かれていた．これに対し，本小節で扱う表現では，感情の中でも情動からは遠のいた安定した感情，あるいは気質や性格が焦点化される．以下は最も単純な形式である．

(26)　【存在・大きさ】
　a. 心ある，心無い
　b. *have {a / no} heart / have no heart for something*
　c. *halfhearted / heartlessness / fainthearted*

(26a, b）の通り，「心」の有無は同情心や分別，情趣を解する力と，*heart* の有無は同情心や関心と対応づけられている．(26c）は（24b）と字義的に対を為す表現である．しかし，狭量であることを表すのではなく，同情心や関心（熱意）の欠落を意味している．

また，「心」や *heart* は形容詞（的な語）と結合することで，人の性格の一部を焦点化する．

(27)　【清濁】
　a. 心が｛汚い／濁る｝
　b. *black-hearted*（cf.「腹黒い」）

(28)　【熱】
　a. 心暖かい，心が冷たい（cf. 胸が熱くなる，胸を冷やす）
　b. *warm-hearted / cold-hearted*

(29)　【重さ】
　a. 心が｛重い／軽い｝
　b. *heavy-hearted / light-hearted*

(30)　【硬さ】[12]
　a. 心がかたい

[12] ここでのラベリングは特定の「性質」に着目したものである。ただし，*heart* は様々な物体に喩えられるという一面も持ち合わせており (e.g. *heart of gold / heart of oak*)，このことを考慮すると，*heart of {iron / marble / stone}* の 3 表現には新たに【素材】というラベリングを与えることもできると考えられる（渡辺秀樹先生のご指摘に基づく）．

b. *soft heart / tender heart / hardness of heart / harden one's heart / heart of {iron / marble /stone} /steel one's heart*

(27) は汚さ・濁り（*black*）の度合いが主体の道徳心・慈悲の度合いに反比例する形で，(28) はその熱が同情心の強さに比例する形で対応づけられている．(29) は「心」や *heart* の重さがその時々の気分のあり様に反映されることを示す例であり，(27)，(28) よりもやや動的である．(30) については，「心」と *heart* がそれぞれ異なる解釈を導いていることに注目されたい．日本語の場合，「心」は「決意」に対応することで，その硬さが決意の強さを意味する．一方の英語では，*heart* の硬さは主体の感受性に対応しており，硬いことは慈悲の欠落を意味している[13]．

(27)–(29)の表現で共通していることは，「心」や *heart* が人そのものを象徴するというメトニミーのほかに，独立した概念メタファーの介入が見られることである．例えば，以下のような概念メタファーを想定することができるだろう[14]．

(31) ＜悪は汚・黒＞（e.g., 鍋島 2011）
a. 汚い手口
b. *a black day*

(32) ＜愛情は暖かさ・嫌いは冷たさ＞（e.g., Kövecses 2000）
a. 暖かい手を差し伸べる，冷たい仕打ち
b. *give a warm welcome / give a cold look*

(33) ＜幸せは上・悲しいは下＞（Lakoff and Johnson 1980）／＜憂鬱は重み＞
a. 気分上々，落ち込む，気分が重い
b. *I'm feeling {up / down / heavy}.*

以上のように，「心」と *heart* の状態・性質は人としてのあり方を反映する．従って，我々は究極的に「心」や *heart* を全く別のものへと交換することで，それまでの考え方や態度を大きく改めることができる．

(34) 【交換】
a. 心を入れ替える
b. *change one's heart*

4.5.2 価値あるものとしての胸部

最後に扱うのが，「心」や *heart* が所有者である主体を離れてやり取りされることを表す表現である（the *heart as* an OBJECT OF VALUE：Niemeier 2000）．

(35) 【奪取・侵略・喪失】
a. 心を｛奪う／掴む／捉える／取る／引く｝
b. *{conquer / win} someone's heart / steal every heart*
c. *lose one's heart to somebody*

上の表現の根底にあるのは，「心」や *heart* が我々一人ひとりにとってかけがいのないものであるという価値認識である．そのため，「心」や *heart* は他人から狙われ，奪われたり侵略されたりすることがある．結果的に，我々の「心」や *heart* の所有権・支配権が他者へと移り，自然とその人に関心や好意を抱くこととなる．また次のように，所有者が自主的に「心」や *heart* を手放す場合もある．

(36) 【献上】
a. 心を｛致す／置く／配る／籠める（込める）／遣う／尽くす／向ける／寄せる｝
b. *offer one's heart / put heart into / set one's heart to somebody*

---

[13] なお，(27) と (29) に関しては，企みや感情が「心」や *heart* の中に収められており，それらが＜容器＞を通じて示されるメトニミー表現とも解釈できる．しかし，①無理にメトニミーとしての分析を加える必要性を感じられないこと，②容器メタファーで見られた「胸」や *bosom/breast/chest* を用いた表現が観察されないことを根拠に，ここでの議論に含めている．

[14] 「硬さ」と「感受性」を結びつける英語の理解様式は，*heart* が感情を経験するにつけて動揺し，傷つけられ，破裂するなどの経験（cf. §4.1，§4.2）から類推されたものと考えられる．

(36) で注目すべきは，日英語で意味の広がりに違いが見られるという点である．英語の場合，*heart* を捧げる（*offer*）・置く（*put/set*）ことは他人の不幸を哀れむこと，あるいは熱意を注ぐことや好意を寄せることを表すが，日本語の「心」表現では，関心・好意（向ける，寄せる）から配慮・気配り（置く，籠める，配る，遣う）への意味の広がりが見られる．そして，「心」を惜しみなく使い果たすこと（致す，尽くす）により，人は自らの全精力を他人のために注ぐことになる．このように，日本語の「心」は「もてなし」の日本文化とも深く関わっていると考えられる．

5　考察

4 節で観察された慣用表現の分布を，表象レベルごとに【表 1】に示す．各項目は，精神作用との結びつきにおいて焦点化される胸部の変化・状態・性質を表している．また，4 列目には各レベルの表現が表す精神作用の意味的傾向を記した．

表象レベル	両言語	日本語のみ	英語のみ	意味的特徴
感覚・運動レベル①	鼓動，閉塞感，不快感，痛覚，動作	熱感覚	呼吸の乱れ	期待・驚き・憤り・悲しみ・恐れ・感動などの感情（特に情動的）
感覚・運動レベル②（誇張）	動揺，圧迫，破裂，損傷，燃焼	閉塞	鼓動の停止	上の感情に加え，喜び・不安・愛・寂しさなど
概念レベル＜容器＞	隠蔽・収容，充満・膨張，露呈，受容，容積	沸騰（≒充満・膨張）	注水，溢出（≒露呈）	期待・感動・怒り・愛・喜びなどの感情に加え，本心・企み・納得・寛大さ
概念レベル＜人＞	存在，清濁，重さ，硬さ，交換（*ただし，日本語では「こころ」を使用）		大きさ，熱	同情心・哀れみ（慈悲）・関心・道徳心などの持続的な感情・人柄
概念レベル＜価値あるもの＞	侵略，奪取，献上（*ただし，日本語では「こころ」を使用）		喪失	関心・愛（好意）・同情心に加え，日本語では配慮

表 1. 胸部に関する慣用表現の類型（日英語）

表から明らかなように，胸部に関する慣用表現は日英語でかなりの共通性が見られる．まず，感覚・運動レベルでは，胸部の内的感覚・外的変化・動作の大半が日英語の両方で用いられている．これらの身体経験は感覚・運動レベル②で誇張され，人が喜怒哀楽するにつけて敏感に反応し，変化する生物・物体として描かれる．さらに意味的特徴に着目すると，感覚・運動レベルの表現では，比較的強く・突発的に生じる感情（＝情動）が表される傾向にある．これは，喜び・驚き・感動などの情動が，我々の身体に最も顕著な変化を与えやすい種類の精神作用であるからである．

概念レベルのうち，＜容器＞のメタファーでは，「容器から外へ」，「外から容器へ」という双方向の内容物の移動が焦点化されている．これらはいずれも，感覚・運動レベルで見た＜身体経験＞−＜精神作用＞という繰り返しの経験が抽象化を経てできた＜胸部＞−＜精神の座＞という対応関係に基づいている．しかしそれだけではなく，感情や考えが胸に収められ，増長し，露呈するといった時系列的な順序（スクリプト）が表現に一貫性を与えている．結びつく精神作用としては，本心や企みなどの思考内容を伴うものや，納得・寛大さなど，もはや特定の身体反応を誘発しない種類の心的側面が加わっている．

＜人＞のメトニミーでは，特定の状況での精神作用というよりは，主体の人格的な一面が表される．そのため，上記の 3 つの分類枠とは異なり，胸部の状態や性質など，持続的・静的な描写が多く，状態動詞や形容詞的な語が用いられている．また，＜価値あるもの＞のメタファーでは，「心」や *heart* が主体の所有物であるという前提のもと，他者とのやりとりを示す語句によって対人的な精神作用が表される．日英

語を対比させると，字義的には類似していても異なる意味を表す表現も見られる ((26), (30), (36)). 特に (36) の表現に関しては，日本の「もてなし」文化を反映した例と考えられ，今後深く掘り下げる余地があろう．なお，これら 2 つの分類枠では日本語の「胸」表現に該当するものが存在せず，代わりに「こころ」が用いられることを見た．2 節でも取り挙げたように，かつての日本人は心臓としての臓器を弁別的に意識していなかったと考えられる．そのため，感情を経験するにつけて得られる内的な感覚を，外から見た「胸」を参照することで伝えつつ，それらの経験から漠然と胸の中に「こころ」なるものが宿ると推測していたのかもしれない（宮地 1972）．この意味で，「こころ」の存在を一般的な精神と対応づけることは納得がいくだろう．以上の議論を踏まえ，(3) で示した第一の仮説に対して次のような回答を与える．

(37) 身体基盤が顕著な胸部は，その比喩表現の多くが日英語で共通している．

また，日英語の胸部の比喩的認知モデルを次のように図式化する．

	感覚・運動レベル	スキーマレベル	概念レベル
	継承 →		
	←		フィードバック
表象	メトニミー， メトニミーに基づくメタファー （<生命体>メタファー）	存在のメタファー， イメージスキーマ	<容器>メタファー <人>のメトニミー <価値あるもの>メタファー
基盤	鼓動，閉塞感，不快感，痛覚， 熱感覚，呼吸の乱れ，動作	一般メタファー・ イメージスキーマの介入， （飲食物の摂取・呼吸）	スクリプト構造 文化的慣習 （e. g.，「もてなし」文化）
認知操作	時間的隣接性	抽象化・類推	統合・複雑化

図 2. 日英語の胸部の比喩的認知モデル

まず，感覚・運動レベルでは，時間的隣接性により，鼓動・閉塞感をはじめとする身体経験が特定の感情と結びつく．これらの経験の反復は，続くスキーマレベルにおいて<胸>が<精神>の象徴部位であるという対応関係の確立・定着を促す（抽象化）．スキーマレベルでは，このほかに飲食物の摂取や呼吸等の反復経験が<容器>のスキーマを誘発し，さらに存在のメタファーの介入により，胸部が<具象物>として認識される．これにより，身体的特徴からは逸脱した具象物の性質に基づく類推が可能になる（e.g., 重さ，硬さ）．最後に，感覚・運動レベル，スキーマレベルと通じて構築された胸部の理解は，概念レベルで統合する．その際，スクリプト的知識によって構造化されると同時に，文化的要因の介入によって多様化する．なお，2 段目の矢印は，それぞれの表象レベルで形成された胸部の理解様式が互いに継承・フィードバック関係にあることを示している．フィードバックに関しては，特に 4.2 節で論じた誇張のメタファー表現を論じる上で不可欠である．というのも，これらのメタファー表現がたとえ生理感覚に基づくとしても，「胸」や *heart* が生物のように騒ぎ，物体のように燃焼すると認識するには，スキーマレベルで論じたような何らかの抽象化を経る必要があるためである．

6 結論

本稿では，日英語の胸部に関する慣用表現を比較分析することで，「身体経験が豊富な胸部は，その比喩表現の多くが通言語的に観察される」という後藤（2015）の主張を検証した．楠見・米田（2007）のモデルに基づく分類・分析の結果，胸部のどのような変化・状態・性質が比喩として用いられ，また胸部がどのような精神作用と結びつくかという 2 点において，偶然とは言い難い共通性が見られた．ただし，胸部の基本語として外的部位を選択するか（日本語），内臓を選択するか（英語）という点において相違が見られるとともに，英語の *heart* に関しては日本語の「胸」には見られない，新たな理解様式（文化モデル）が観察された．この *heart* 特有の理解様式に関しては，日本語の「こころ」を比較対象として導入することで，日本語にも類似した理解様式が存在することを論じた．

本研究は，Kövecses（2005）で提示された「身体経験」，「社会・文化経験」のうち，前者に重点を置いたものである．4 節で観察したように，英語の *heart* は特に情緒的な精神を司る身体部位として理解されており，この限りにおいて，身体経験の重要性を否定する余地はない．しかし可能性として残るのは，*heart* と情緒的側面を結びつける社会・文化的文脈の存在である．Niemeier（2008）の議論によれば，英語の *heart* は本来，知性とも対応していたが（例えば，*learn something by heart / take something to heart* はその名残），感情と理性を隔てるデカルト的二元論により，現代の西洋文化における *heart*（感情）と *head/mind*（理性）の区別が確立した．Niemeier は，感情の座としての *heart* の意味はデカルト的二元論の影響を無視して論じることはできないと述べている．このような社会・文化的文脈については，もう一つの検証課題である腹部の理解，本稿で扱い切れていない「こころ」の理解に関する議論の中で，改めて追求する予定である．

7　参考文献

有薗智美 (2007)「「頭」「胸」「腹」－精神活動の在り処としての身体部位詞－」．『日本認知言語学会論文集』，第 7 巻，310–320.

Geeraerts, Dirk and Stefan Grondelaers (1995) “Looking Back at Anger: Cultural Traditions and Metaphorical Patterns.” In J. R. Taylor and R. MacLaury [eds.], *Language and the Cognitive Construal of the World*, 153–179. Berlin and Yew York: Mouton de Gruyter.

Goossens, Louis (1990) “Metaphtonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Linguistic Action.” In *Cognitive Linguistics*, 1 (4), 323–340.

後藤秀貴 (2015)「「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴－比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から－」．『日本言語学会第 151 回大会予稿集』，40–45.

後藤秀貴 (2016)「「腹」の比喩表現と認知モデル再考－「きも」，「はらわた」，「ふ」との接点－」．『言語文化共同プロジェクト 2015：越境するレトリック—意味・認識・間テクスト性』，45–56．大阪大学大学院言語文化研究科.

Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason.* Chicago: University of Chicago Press.（菅野盾樹・中村雅之［訳］(1991)『心の中の身体』．紀伊國屋書店.）

国立国語研究所コーパス開発センター (2015)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き第 1.1 版」．国立国語研究所.

Kövecses, Zoltán (1990) *Emotion Concepts*. New York: Springer-Verlag.

Kövecses, Zoltán (1995) “Anger: Its Language, Conceptualization, and Physiology in the Light of Cross-Cultural Evidence.” In J. R. Taylor and R. MacLaury [eds.], *Language and the Cognitive Construal of the World*, 181–196. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Kövecses, Zoltán (2000) *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kövecses, Zoltán (2005) *Metaphor in Culture: Universality and Variation*. New York: Cambridge University Press.

楠見孝 (1996)「感情概念と認知モデルの構造」．土田昭司・竹村和久［編］．『感情と行動・認知・生理：感情の社会心理学』，29–54．誠信書房.

楠見孝・米田英詞 (2007)「感情と言語」．藤田和生［編］．『感情科学の展望』，55–84．京都大学学術出版会.

Lakoff, George (1987) *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作他［訳］(1993)『認知意味論：言語から見た人間の心』．紀伊國屋書店.）

Lakoff, George and Mark Johnson (1980/2003) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.（渡部昇一他［訳］(1986)『レトリックと人生』．紀伊國屋書店.）

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.（計見一雄［訳］(2004)『肉中の哲学：肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』．哲学書房.）

Lakoff, George and Zoltán Kövecses (1987) “The Cognitive Model of Anger Inherent in American English.” In D. Holland and N. Quinn [eds.], *Cultural Models in Language and Thought*, 195–221. Cambridge: Cambridge

University Press.
宮地敦子 (1972)「「こころ」から「心臓」へ－身体語彙の変化－」.『国語学』, 第 104 巻, 33–44.
鍋島弘治朗 (2011)『日本語のメタファー』. くろしお出版.
Niemeier, Susanne (2000/2003) "Straight from the Heart: Metonymic and Metaphorical Explorations. In A. Barcelona [ed.], *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: A Cognitive Perspective,* 195–213. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
Niemeier, Susanne (2008) "To Be in Control: Kind-Hearted and Cool-Headed. The Head-Heart Dichotomy in English." In F. Sharifian, R. Driven, N. Yu, and S. Niemeier [eds.], *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, 349–372. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
齋藤孝 (2000)『身体感覚を取り戻す：腰・ハラ文化の再生』. 日本放送出版協会.
Sharifian, Farzad, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier (2008) "Culture and Language: Looking for the 'Mind' inside the Body." In F. Sharifian, R. Driven, N. Yu, and S. Niemeier [eds.], *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages*, 3–23. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
田中聰子 (2003)「心としての身体－慣用表現から見た頭・腹・胸－」.『名古屋大学言語文化論集』, 第 24 巻 2 号, 111–124. 名古屋大学.

＜辞書（日本語）＞
金田一京介・大石初太郎・佐伯梅友・野村雅昭［編］(2001)『新選国語辞典（第八版ワイド版）』.小学館.
松村明［編］(2006)『大辞林（第三版）』. 三省堂.
中村明［編］(1993)『感情表現辞典』. 東京堂出版.
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部［編］(2001)『日本国語大辞典（第二版）』, 第 5 巻・第 12 巻. 小学館.
東郷吉男［編］(2003)『からだことば辞典』. 東京堂出版.
梅棹忠夫・阪倉篤義・金田一春彦・日野原重明［監修］(1989)『講談社カラー版日本語大辞典（初版）』. 講談社.

＜辞書（英語）＞
Chapman, Robert L. [ed.] (1992) *Roget's International Thesaurus,* 5th ed. New York: HarperCollins.
Hornby, Albert S. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English,* 7th ed. Oxford: Oxford University Press.
小林祐子 (2008)『しぐさの英語表現辞典（新装版）』. 研究社.
McCaleb, John G.・岩垣守彦［編著］(2003)『英和イディオム完全対訳辞典』. 朝日出版社.
渡邉敏郎・Edmund R. Skrzypczak・Paul Snowden ［編］(2003/2008)『新和英大辞典（電子増補版）』. 研究社.